

ガタリと共生の条件

濱田 力稀*

Guattari and the condition of *kyosei*

HAMADA Riki

論文要旨

本稿は、共生の条件、あるいは生成変化の条件を問う。生成変化の概念は、これまで理解されてきたような様態についての議論というだけでなく、共生についての議論でもある。ここで注目すべきはガタリが現実において生成変化に投げ出されていない、つまり共生することのできない、生の様態を問題にしていたという点である。以上を踏まえ、本稿ではまずガタリとチンが＜生き方＞という同じ問題系に取り組んでいたことを確認する。次に、彼女がしばしば用いる不確定性（*precarity*）の語に着目し、そこから取り出される不安の概念をサルトルを通じて扱うことで、共生の不可能性を明らかにすることを試みる。そして第三に、不安によって不可能となる共生を可能にするために、近藤によって提示された相互行為論に入る。最後に、これらの議論を踏まえて、共生の条件の一端を提示することを試みる。

キーワード ガタリ、共生、生成変化、チン、相互行為論

Abstract

This paper interrogates the condition of *kyosei* and becoming. The concept of becoming is not confined to a discussion of modes as it has been conventionally understood but also encompasses the notion of symbiosis, or coexistence (*kyosei*). Using the well-known example of the relationship between wasps and orchids, Félix Guattari problematizes modes of life that, in reality, are not oriented toward becoming. If Guattari is correct in asserting that there exists a mode of life that does not become, this would, in turn, suggest that *kyosei* would be impossible in such cases. Building on such premise, this paper explores the conditions of *kyosei*. Firstly, we examine how Guattari and anthropologist Anna Tsing problematize modes of lives in their work. Secondly, we focus on Tsing's frequent use of the term “precarity” and discern its connection with Jean-Paul Sartre's notion of anxiety. Through this discussion, we attempt to clarify the impossibility of *kyosei*. Thirdly, to investigate the necessary conditions that make *kyosei* possible despite anxiety, we engage with Kazunori Kondo's interactive theory. In conclusion, we will briefly discuss the condition of *kyosei* from this new perspective.

* 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程；tokai5riki0210@gmail.com

Keywords: Guattari, *kyosei*, becoming, Tsing, interactive theory

1. はじめに

共生について語ることは、同時に生成変化について語ることでもある(MP:291=159)。たとえば、ランはスズメバチの雌に擬態することで彼らを誘き寄せる。スズメバチは交尾をするつもりでランに近づく。このとき、ランはスズメバチの雌の生殖器官を担い、スズメバチはランの花粉を運ぶことでランの生殖器官と化す。この例は、ガタリとドゥルーズが頻繁に持ち出す共生と生成変化の例である。生成変化とは、複数の項がブロックを形成し、そこでそれらの項が識別不可能になることを指す(MP:292=160)。このようにスズメバチとランが互いの生殖器官になることでそれぞれの境界線が不明になること、これが生成変化である。したがって、共生の問題は生成変化の問題である。

ガタリとドゥルーズは、この現実にある例を通して、生成変化について論じている。しかしながら、なぜ彼らは生成変化について改めて語らなければならなかったのだろうか。それは一つには、生成変化という現実の運動が覆い隠されるような状況があったからだと考えられる。第四節で見ることとなるが、ガタリが問題としていたのは、現実において、生成変化しない様態があるということである。そして生成変化が共生と重ねて論じられる以上、ガタリは共生ができていない現実を目の当たりにしていたと言えるだろう。以上を踏まえて本稿が目的とするのは、ガタリが問題としていた共生＝生成変化の不可能性についての議論を深化しつつ、共生の条件の一端を明らかにすることである。

そこで我々は次の手順を通る。まず、ガタリにおけるエコゾフィーの概念が、＜生き方＞に向けられていることを明示する。そのために、以下では『三つのエコロジー』にテキストを限定し、議論を進める。ここで生き方という問題を明示する必要があるのは、共生がある様態と様態の関係である以上、まずはその様態の生き方が問題になるはずだからだ(第二節)。

次に具体的な事例として、チンの『マツタケ』を参照する⁽¹⁾。したがって、ガタリを踏まえて共生について論じるならば、その実際の活動形態を

提示することも重要である。そして、チンはガタリと共鳴する問題系を抱えており、ポスト・ガタリ的な活動事例、特に共生に関する活動事例を見るのに適していると考えられる（第三節）。

加えて彼女の重要性は、彼女が繰り返し取り上げる＜不確定性（precarity）＞の語にもある。これはガタリにも見られる語である。そして、この語が示唆するものを検討することで、我々は共生がいかにして可能なのかという問いをより具体的にすることができる。ここでの我々の問いとは、＜不確定性にもかかわらず、なぜ我々はスズメバチとランのように生成変化するのだろうか＞である（第四節）。

以上の不確定性についての問いから取り出されるのは、生成変化の不可能性としての＜不安（angoisse）＞である。この概念を、ガタリも参照しているサルトルの議論を経ることで概観する。これによって新たな問いが立てられる。すなわち、＜生成変化をするものとししないものを分つのは何か＞である（第五節）。

このような議論と問いの変遷を経たのちに、相互行為論を先の問いに対するアプローチの一つとして取り上げる。我々が持っている先が見通せないという不安は、他者との行為においても現れる。ここで本稿が基づくのは、近藤による議論である。特に、彼が提案している＜カジノ型＞と＜アナーキー型＞に分類されるゲームという相互行為の二類型は、本稿で重要な位置を占める＜不確定性＞の語と共振する。この議論を経ることで、第五節で建て直した問いに答えることを試みる（第六節）。

ここまでの議論の締めくくりとして、ガタリ、チン、近藤の三者に共通している視座であるアジャンスマンの概念を取り上げる。そこで重要になるのは、アジャンスマン同士の関係と＜群れ＞の概念である。そしてこれらの概念をこれまでの議論に差し戻すことで、領土を形成することが共生の条件ではないかという仮説を提示する（第七節）。最後に、本稿での議論のまとめと結論を付すこととする（第八節）。

2. エコゾフィーとは何か—三つのエコロジーについて

本稿の内容に入るにあたってまず明らかにしておかなければならないの

は、ガタリの<エコゾフィー>が何なのかである。ガタリによれば、それは「環境、社会的関係、人間的主観性の三つの領域（registre）の倫理-政治的な結合」⁽²⁾（TE:12-13=10）である。ここでの三つの領域はそれぞれ環境的・社会的・精神的エコロジー（エコゾフィー）と呼ばれ、これらは「人間実存の生産」（Ibid.:13=10）という問題に差し向けられている。人間実存の生産、すなわち人間の生のあり方を、環境・社会・人間的主観性（精神）という三つのエコロジーの結合によって変化させること、あるいは新たに作り出すこと、これがエコゾフィーの目指すものである⁽³⁾。

2.1. 社会的エコロジーについて

ここからは三つのエコロジーのそれぞれを見ていこう。ガタリはまず、社会的エコロジーについて記述している。

[……] 社会的なエコゾフィーは、夫婦、家族、都市的な文脈、労働の場といったもののなかでの、存在の仕方 (*façon d'être*) を変容させたり (*modifier*)、再発明したりする、固有な実践を発展させることから成り立つ。(Ibid.:22=19)

ここでは社会的なエコゾフィーを社会的エコロジーとみなしても差し支えない。これは存在の仕方を、つまり生の様態を変化／再発明する実践を発展させる。生の様態は決して所与のものとしてあるのではない。それはむしろ、我々を取り巻くさまざまなファクターによって規定され、課され、生産されるものである。であるならば社会的なエコロジーは、家族や労働環境などの社会的と呼ばれうるものの中で、生の様態を生産しなおすことに向けられた実践を作り上げるものと言える。

2.2. 精神的エコロジーについて

次に、精神的エコロジーについて見てみよう。ガタリは次のように述べている。

[……] 精神的なエコゾフィーは、主体と身体、幻想、過ぎていく時間、生と死との関係を再-発明するように向かうだろう。それは、マス・メディアや

情報通信の画一主義、流行の順応主義、世論操作等々に対する解毒剤を探す方向に向かうだろう。その実行方法は、科学性の古い理想にいまだ取り憑かれている「精神 (psy)」の専門家よりも、芸術家の方法により近いものとなるだろう。(Ibid.:22-23=19-20)

ここでも同様に、エコゾフィーをエコロジーと置き換えても問題はない。精神的エコロジーとは、マス・メディアなどの様々なものと主体との関係を作り直すものである。そしてそのような関係は、芸術家のような仕方で画一化から抜け出していくと言われる。

では、芸術家のような仕方とはどのような仕方なのだろうか。ガタリはブルーストを例に取って、次のように言っている。

ブルーストは、主観化の触媒的な中心としてのこの様な実存的リトルネロを、余すところなく分析した。[……] 我々は日常生活や、社会的な生活の様々な段階、より一般的に言うと、実存の領土を形成するという問題に直面するたびに、ブルーストの著作と同様の、このような生態-論理 (éco-logique) を見出すだろう。さらに、この様な領土は、想像しうる限りの脱領土化も同様に可能である。[……] これらの多様な実存的な諸線に共通して存在する唯一の点は、特異な実存者の生産を支え、集列化した集団の再特異化を行うという点である。

(Ibid.:38-39=36-37)

<芸術家のような仕方>とは、自らの実存的リトルネロを分析することである。リトルネロについては本稿第七節で立ち戻るが、ここでは自らを取り巻いている要素とそこでの自らの立ち位置を分析することであると理解しておこう。例えば、いつも通勤する際に通る道、お気に入りの店など、我々の日常的には反復的な要素が伴っている。その中で、各々は自らに馴染みのある空間、すなわち<領土>を形成していく。これを踏まえてガタリが述べているのは、その馴染みのある空間を分析すると自らの生態学が浮かび上がるということである。そして自らの現状の生態が判明になれば、何をもってそこから<逸脱した>と云い上げるのかも判明になる。この逸脱がガタリが<脱領土化>と呼ぶものである。精神的エコロジーはこのことに向けられている。

2.3. 環境的エコロジーについて—三つのエコロジーのまとめ

最後に、環境的エコロジーを見てみよう。ガタリは、「環境エコロジーに特有の原理は、そこでは最悪の破局から柔軟な変化のように、すべてが可能だということである」(Ibid.:68=67)と述べている。しかし、環境エコロジーへの直接的な言及はこのほかにもほとんどなく、情報量が他の二つのエコロジーに比べて圧倒的に少ない。

しかしガタリの問題意識を見ることはできる。彼は、「もはや決して、自然は文化と切り離されることができず、我々は生態系、機械圏、社会的かつ個人的な参照の宇宙との間の相互作用について、横断的に考えることを学ぶ必要がある」(Ibid.:34=31)と言う。つまり、ガタリは環境問題と社会問題、そして人間精神の問題とを同一の問題系として考えようとしている。そしてとりわけ、環境問題を人間から独立した<自然>にのみ当てはまる問題として捉えることを拒絶している。であるならば、環境エコロジーは<自然>と<文化>の二元論に対して、<自然>という観念を別様に立てることに向けられていると言える。環境＝自然という等式はもはや成立しない。むしろ、社会・人間精神と同様の水準で自然を構想する必要があるのだ。

以上の三つのエコロジーは、共にエコゾフィーを形成する。しかし、これらの一見すると独立している領域はどのように接合されるのだろうか。それは、これら三つの領域が共有しているディシプリンとしての<倫理-美的な領域>においてである (Ibid.:72=71-72)。

では、この共通のディシプリンとしての倫理-美的な領域とは何を指しているのか。これまでの三つのエコロジーのそれぞれの規定を振り返ってみよう。まず社会的エコロジーは、生の様態を変化／再発明するものである。次に精神的エコロジーは、自らの生態を明らかにすると同時にそこから逸脱することである。最後に環境的エコロジーは、社会、精神と同じ水準へと自然を置くことであると言えよう。そしてこれら三つの規定が<人間実存の生産の問題>に帰着するならば、それは Querrien (1996) の言うように、生の様態という問題系を共有していると言える。したがって、エコゾフィーの問題はまさに「生き方 (façon de vivre)」(Ibid.:13=10)であり、倫理-美的な接合は生き方においてなされる。

3. エコゾフィー的な取り組み—マツタケ・社会・人間

では次に、チンの取り組みを見ていこう。ここではチンの『マツタケ』にある京都の「まつたけ十字軍」の活動を取り上げる。これによって目指すのは、チンの描写した活動がエコゾフィー的な活動だということを確認すると同時に、彼女の持っている問題系がガタリと一致しているということを見ることである。

「まつたけ十字軍」は、マツタケを通して里山を再興しようと取り組んでいる団体である。チンによると、「彼らは、マルチ・スピーシーズ・ギャザリングス〔複数種の集まり〕の変化のみならず、自分たちの変化も刺激する一つ的手段として景観を攪乱している」(M:256=388、括弧内は原文) 彼らは、「里山を復活させてすき焼きを食べよう」をスローガンに、日々活動に勤しんでいる。そんなまつたけ十字軍を構成しているのは、定年退職していた人々の他に、学生、教育者、科学者といった人々からなるボランティアである。

彼らの活動は多岐にわたる。例えば、マツタケが生育できる環境を作るために、森林を攪乱する作業がある。他にも、里山という環境を活用しながらマツタケ以外のものとも関わっている。それだけでなく、ボランティアに来た他の人々との繋がりも生まれる。昼食ときには、自己紹介や冗談を通して仲を深める。チンも流しそうめんの昼食をともに囲ったそうだ (Ibid.:259=390)。

このように、人々と何かを共になすことは、マツタケや里山だけではなく、人間の失ってしまった社会性と精神性を回復させる。

里山再生運動は、共同体生活の失われてしまった社会性を回復する試みである。年配の人や若い人、子どもも協働できるように企図され、教育と共同体づくりとを、作業と楽しさと結びつけることでおこなわれている。農家と松を助けるよりも、より巻き込まれている (involved)。里山での作業に参加することによって、人間精神が再生する。あるボランティアは説明してくれた。(Ibid.:262=394)

里山再生は疎外感の問題に取りくんでいる。というのも、里山によって、ほかの存在との社会関係が刷新されるからである。人間は、生の可能性 (livability) を作る多くの参加者の一つにすぎなくなる。参加者たちは、樹木と菌が自分たちと結びつくのを待っている。参加者たちは人手を必要とする景観に働きかけるが、その必要を超えてもいる。[……] いずれも景観だけではなく、人をも再生させている。(Ibid.:263=395)

里山は、現代に生きる人間が忘れてしまった＜共生＞を思い出させてくれる場所である⁽⁴⁾。そこでは、＜自然＞との関わりを通して、そしてその一部としての人間との関わりを通して、人間も景観も同時に変化していく。

マツタケが発生したとしたら——二〇〇八年の秋に「十字軍」がよく手入れた中腹にマツタケが出た——ボランティアたちは興奮の極みにいたるであろう。森を創造する過程に参加する人びととの、予期せぬ絡まりあい (entanglement) ほど感動的なものはない。松、人間、菌は共に存在するものとなったときに、あらたなものとなる。(Ibid.:264=396)

このように、チンが実際に見、肌で感じた活動は、社会・精神・環境というガタリの三つのエコロジーと重なる。さらに、以上のような記述には、すでに＜生き方＞という問題が含まれている。チンは『マツタケ』の冒頭で次のように述べている。

しかし、生存 (survival) とは何なのか？ [……] 本書では、生きつづけることは——あらゆる種にとって——生が可能であるような協働であることを論じる。協働は差異を超えて作用することを意味し、そのことが汚染へと導いてくれる。協働がなければ、我々は皆死んでしまう。(Ibid.:27-28=44)

松、人間、菌が共に存在するものとなったとき、人間という様態の＜生き方＞は、現代の都市的な生き方から変化するだろう。マツタケが人間の関与なしに発生しないように、人間も他の様態に依存することなしには存在することができない。このことをチンは＜汚染＞と呼んでいる。我々はチンの

言うように協働している。ある生の様態と生の様態の関係、これがチンにおける〈生き方〉の問題である。彼女は確かに、「マツと菌根菌とマツタケという複数種が『ともに生きている』さまを主題化した」（奥野 2023:229）のだ。

しかし、ここで避けることのできない問いが現れる。チンが不思議に思ったのは、マツタケが必ず収穫できるかわからないにもかかわらず、人々が里山に関わるという事実である。なぜマツタケの収穫という一番の目的が達成されるかが不透明なのにもかかわらず、人々は里山に関わるのだろうか。

[……] ある活動家は、自分が生きているうちにはマツタケが出てこないかもしれないことを認めている。彼ができることはといえば、森を攪乱し、マツタケが出てくることを念じるだけだ。

なぜ、景観に働きかけることが、改新された可能性の感覚を喚起させてくれるのだろうか？ どうすれば、それは生態系だけではなく、ボランティアたちをも変化させるのであろうか？（M:258=388-389）

これは、チンがまつたけ十字軍について記述しているなかで、最も根本的な問いであると同時に、エコロジーの問題を考えるなかでも根本的な問いである。そして、この問いを裏付けるのが、〈不確定性（precarity）〉という語であると考えられる。では、不確定性について見ていこう。

4. 〈不確定性〉をどう考えるか

では、不確定性という語をどのように受け取ることができるだろうか。ここではチンとガタリの視点から、この語について考えてみたい。先に、チンから見てみる。彼女は次のように書いている。

不確定性（precarity）とは、ほかのものに対して脆弱な状態である。予期せぬ出会いによって、我々は一変させられる。我々は管理されているのではないし、自分たちをも管理していない。コミュニティの安定した構造に頼ることができず、推移し続けるアセンブリッジ（assemblage）へ投げ出されてしまう。そこで

は他者だけでなく、自分も作りなおされる。(Ibid.:20=30)

チンにとって、不確定であるということは、他のものに対して脆弱だということである。何ものも他の事物からの影響なしに生きることはできない。それゆえ、チンにとっては不確定性こそが現実である (Ibid.:20=30)。

一方で、ガタリが使う不確定の語はどのようなものなのだろうか。

三つのエコロジーが我々に直面させる実存の領土は、即自存在や自らの上に閉ざされたものとして与えられるものではない。そうではなく、有限で有限化され、特異で特異化された不確定な (*précaire*) 対自存在として与えられるのであり、地層化された致死的な繰り返し (*réitération*) か、あるいは人間的なプロジェクト=投金によって、実存の領土を「居住可能 (*habitable*)」なものにするプラクシスに基づいた、プロセス的な開放に分岐することができる。(TE:48=48)

本稿で重要な部分を抽出しよう。ここで<不確定な>という言葉は、サルトルの概念である対自存在と合わせて用いられている。さらにそれは、生き方という問題と関係付けられている。そして一見してわかるように、ガタリにおける<不確定>という語は決して明白ではない。これを明らかにするためには、サルトルの<対自存在>の概念に触れなければならないだろう。

サルトルにおける対自存在は、「それ自身との一致であらぬ一つのあり方」(EN:134=239) (強調は原文) と定義される。つまり、自己と自己とが一致しない様態が対自存在である。したがって、対自存在たる人間は一つの「分裂」として定義され、それゆえに不安定である (Malinge 2018:139)。

先のガタリからの引用に戻ろう。サルトルの対自存在の概念を経ると、ガタリの主張をより明確に理解できるようになる。ここでの要点は、対自存在は、実存の領土が繰り返しによって窒息するか、あるいはプロセス的な開放性へと開かれるのか、という分岐である。この分岐は言い換えると、繰り返しによる習慣的かつ同一的な様態で生きるのか、あるいは対自存在のように差異化的に生きるのかという分岐として理解できる。そして、ガタリが対自存在の概念をそのようなものとして受け取っているならば、ガタリにお

ける不確定な対自存在とは変化の可能性であると言える。

以上のチンとガタリの議論を整理しておこう。チンから見えてきたのは、不確定性とは他のものの影響を受け、変様させられるという性格である。他方でガタリから見えてくるのは、不確定性とは差異化的に生きる可能性だということである。以上に鑑みると、両者とも不確定性が変化の可能性であるという点で一致している。

しかし、そこには乖離もある。それは、ガタリが対自存在における分岐の一方として生成変化の可能性が閉ざされうるということを想定しているのに対し、チンにとっては生成変化が現実であり、変化しないものはないという点だ。確かにチンの言うように、権利上はみな生成変化へと巻き込まれている。しかしながら現実においては、全員が生成変化に巻き込まれた生き方をしているわけではない。これこそガタリの問題意識である。したがって、次のような問いがたつ。すなわち、＜不確定性によって生成変化しないという様態があるにもかかわらず、なぜ生成変化するものもいるのか＞という問いである。とすればここには、あるものが生成変化へと巻き込まれることを拒むような、何らかの機制が働いているはずである。では、その機制とは何なのだろうか。

5. 不安、あるいは共生と生成変化の不可能性の条件

生成変化することを拒んでしまう機制は＜不安＞であるように思われる⁽⁵⁾。そしてこの不安は、不確定性のゆえに生じる。これについて詳しく見ていくために、前節の対自存在についての議論に戻りたい。

対自存在とは、自己と自己との間にギャップがもたらされている様態であった。しかし、対自存在の内実はそれにとどまらない。そこで我々が考える必要があるのは、＜自由＞と＜可能性＞である。

サルトル (EN:68=122) によると、「人間の存在と、人間が《自由である》こととのあいだには、差異がない」(強調は原文)。しかしそれは、人間が対自存在としてある限りにおいてである。それゆえ Gervais (1969:88) が言うように、「自由とは即自を遠ざける能力 (aptitude)」であり、自己に束縛されていない自己を可能にするものである。そして、人間がこの自由を意識する

のは、「不安」においてである (Ibid.:73-74=131)。

これに関してサルトルが例に挙げるのは、有名な断崖絶壁を前にしたときの例である。

以上にあげた色々な例において、不安は何を意味しているであろうか？もう一度、めまいの例をとってみよう。めまいの前触れとなるのは、恐怖である。私はいま或る断崖に沿った狭い小径、手すりも何もない小径のうえにいる。この断崖は避けられるべきものとして、私の前に与えられている。この断崖は死の危険をあらわしている。同時に、私は、普遍的決定論に属する幾つかの原因、この死の脅威を現実に変じうる幾つかの原因を考える。私は石ころのうえで滑って深淵のなかに落ち込むかもしれない。小径の脆い土が私の足もとで崩れるかもしれない。(Ibid.:75=133-134) (強調は原文)

ここでサルトルは、恐怖と不安を区別している。ここで恐怖とは、石ころで滑って落ちること、脆い土が自分の足もとで崩れることである。つまり、恐怖は行為する主体にはどうすることもできない、外的な<蓋然性 (probabilité)>に基づいている。これらの恐怖に対して、私は小石に注意して進むなど、そうした蓋然性を排除するように努める。このような行動をサルトルは<可能性 (possibilité)>と呼ぶ (Ibid.:75-133)。そして、この可能性にこそ不安が存する。なぜなら、私が小石に注意して進むのか、小石を気にしないのかを規定するものが何もないから、すなわち自由だからである。つまり不安は、我々がどの行動を取るのかという選択ができないこと、その行動の結果が決定されていないという<未規定性>を意識したときに現れる⁽⁶⁾。

恐怖は厳密に決定された超越的な将来を私にひきわたすのであるが、かかる恐怖を避けるために、私は反省のなかに避難する。けれどもこの反省は、私に決定されていない将来をしか提供しえない。それはこういう意味である。私が或る行為を可能なものとして立てるとき、この行為はまさに私の可能性であるがゆえに、私は、この行為をたもつことを私に強いるものは何もないという

ことを、了解している。(Ibid.:77=137) (強調は原文)

このように、私の行動の結果としての将来は未規定である。とすると、前節で見た変化の可能性としての不確定性も、同様に未規定であり、不安を催すものであるはずだ。したがって、稲田(2003:166)が「脱領土化を目指す『自由』は、それほど価値のあるものなのか」と問い、「一世代前のサルトルにとっては逆に、自由は実存的不安をもたらすものだった」と指摘しているのは、全く正当である。

では、我々はこのような不安、不確定性、未規定性といかにして向き合うことができるのだろうか。サルトルのテキストから、二つの態度を見出すことができるように思われる。つまり、「われわれを即自存在のなかに投げ込む脱自(ek-stase)と、われわれを非存在のなかに巻き込む脱自」(EN:93=167)である。前者が即自存在、すなわち生成変化の可能性を閉ざした様態であることから、それに対置される後者が対自存在であると言えるだろう。そして、前者の態度をとった場合に、共生の不可能性が見出される。なぜなら、即自存在が生成変化を拒む様態である限りにおいて、そこで自己は生成変化することをやめ、そのときにスズメバチとランのような互いの生成変化による共生は不可能となるからだ。

とはいえ、ここには二点の不足がある。まず、対自存在と即自存在という二つの類型は人間とそれ以外という二分法を生み出していること。スズメバチとランはサルトルの類型では即自存在であり、対自存在たりえる人間とは区別されている。しかし実際には、彼らは常に自己と自己とが一致している様態であるにもかかわらず、マツタケを掘っている人々と同様に生成変化し共生している。したがってサルトルの類型は、ここでは不十分である。二つ目に、共生の可能性について語ることができていないという点である。では、不安によって共生が不可能な状態と、反対に共生が可能な状態とを分つものは何か。

6. 共生の条件としての相互行為論

この問いに答えることを可能にするのは相互行為論であるように思われ

る。そこで、相互行為論について考えてみよう。ここでの議論が依拠するのは、近藤によるものである。近藤は、相互行為論の主体を、＜異律的な主体＞という概念で説明している。それは次のようなものである。

異律的な主体とは、二つとは限らない、多なる異律的な主体が、たがいに独立して動きながらもそれが巻き込み／巻き込まれている動きをある程度まであてにしながら相互が動くことで、ひとつの共棲的な「巻き込み／巻き込まれ」関係が達成されるような主体の在り様である。(近藤 2023:78)

近藤がここで提示している異律的な主体は、チンにおける不確定性のなかの主体、そして生成変化の項の動きにかなり近い。我々は、他の様態に対して脆弱で不確定な存在である。そして＜私＞が一つの様態である限りにおいて、他の様態も多かれ少なかれ、＜私＞に巻き込まれている。これが異律的な主体であり、これから議論する相互行為論のアクターである。

しかし近藤は、人間の異律というあり方が、他のものとは少し異なるということを描いている。そしてこの差異が、すでにみた行動の未規定性という点に現れている。どういうことか。近藤はこれを＜リハーサル＞という日常的な語句を概念化することによって説明している。近藤によると、リハーサルとは次のようなものである。

「リハーサル」とは、中枢神経系をもつ動物の多くが様々な程度で有している能力のひとつであり、ある環境や場面において自らや他の動物の行為がどのように展開するかをあらかじめイメージする能力である。(同書:98)

これは要するに、「環境がアフォードする情報を適切にとらえ、それを確実に行為の成功へと導くための能力」(同書:101)である。

しかしながら、我々人間(ホモ・サピエンス)は、サルトルが言うところの対自存在である。つまり、我々自身について考えると同様に、他者が考えていることを考えることもできてしまう。これを近藤は次のように言い表している。

[……]「わたし」が「リハーサル」をすると実際にその「他者」が「リハ

ーサル」する可能性を排除することが原理的にはできない、ということである。なぜなら、他者がもっている「わたし」の情報を「わたし」は詳らかに知ることができないからだ。「わたし 2」（他者と私相互のリハーサルの二回目における、他者のリハーサル 2 の中の私）の「意図」を決定できる情報も、実のところ、そのように「わたし」が決定するように導くための「他者」による巧妙な畏であるかもしれないではないか。かくして、「わたし」の「リハーサル」を決定しようとする、「他者」の「意図」を決定しなければならないが、そのためには「わたし」の「リハーサル」が決定していなければならない、という循環問題が生じる。この循環は、時間的には無限となり、「リハーサル」のプロセスが停止不可能、つまり「決定不可能」となる。（同書:103）（括弧内補足は引用者）

ここで我々は、サルトルと同様に、行為を決定する要因の未規定さに出会うこととなる。先にあげたサルトルの例では、相手は石ころだったため、その相手の行為の意図を探る必要はなかった。だが、サルトルの極端な例とこの近藤の主張は同じところに至る。すなわち、「知ることのできないことが存在」（同書:104）し、「なにものによっても決められないことがある」（同上）ということである。したがって、我々はまたしても未規定性と出会う。ではこれから逃れるにはいかにすればよいか。

近藤は、行動の未規定性から逃れるやり方が大きく二つに分かれるとしている。一つが、人間同士の共通項を見つけ出し、それをルールという第三項として立てる方向。もう一つが、とりあえず無根拠に＜意味＞を決定してしまうという方向である。そして彼はこれを、相互行為論の一つのモデル・ケースとしてのゲームに落とし込んでいる。その場合、前者は合意としてのルールを設定して、その範囲内で行為をするケースであり、後者は、その都度の一手によってルールが作られると同時に変えられるというケースである。この前者を、近藤は「カジノ型」と呼び、後者を「アナーキー型」と呼んでいる（近藤 2023:121-122）。

カジノ型とアナーキー型の両者は一見すると対立的であるが、実際には相互依存の関係にある。アナーキー型の一手がなければ、そもそもカジノ型のようにルールを形成し、その枠内で行為することはできない。一方でアナーキー型しかなければ、ルールが常に変動し続け、ルールそのものがなくな

ってしまい、またもや行為の不可能性へと逆戻りする。それゆえ、人間同士の相互行為はこの両者のグラデーションを彷徨っていると言うことができるかもしれない。

このとき、カジノ型の類型が成立する場合、＜何によっても決められないこと＞は、ないことにされる。なぜなら、ゲームのルールに則って他者が行動することを我々はあてにし、それを足場にして自らも行動することができるからである。そうでなければ我々は車を運転することさえままならない。このとき、我々は行動の未規定性をくなくくにする＞ことができる。この場合、不安は転じて＜期待＞となるだろう。

しかしながら、ここで考えなければならないことがある。それは、不安を期待へと転じることでできるカジノ型の相互行為を過度に信用してはならないということである。純粋にカジノ型な相互行為を想定したとき、このような相互行為はルールの上でしかなされないため、その相互行為にとって異質なものを受け入れる余地がなくなってしまう。そして異質なものを受け入れることができないならば、そこでは必然的に共生の可能性が閉ざされてしまうこととなるだろう。

たしかに、ここまでの議論から、近藤の議論が人間にのみ妥当するのではないかという批判を考えることができる。しかしながら、この批判は的外れである。我々人間は、これまでに集積した膨大な知識を駆使して、天気予報や農業を通じて＜自然＞と相互作用をしている。このとき、人間はすでに、＜自然＞に対して何らかのフィードバックを期待するという、十分にカジノ型の相互行為を行なっているからだ。

であるならば、問題はもはや人間と非人間との共生ではない。それよりはむしろ、いかにして不確定性を保ちながらそれに対処することができるかが問題である。そこで本稿は、近藤・ガタリ・チンに共通する＜アレンジメント＞の概念に着目したい。この概念はガタリとドゥルーズによって、アジャンスマンの名で提唱された概念であり、チン自身も彼らからアセンブリッジという語でこの概念を借用している。したがって、三者の結節点としてアジャンスマンの概念を論じることができるはずだ。

7. アジャンスマンと共生、あるいは生成変化の条件

では、そもそもアジャンスマンとはいかなる概念なのか。まずはチンのものから見てみよう。チンはまず、アセンブリッジを「閉じていない集まり」(M:22-23=33)とし、「アセンブリッジが生き方 (lifeways) を作る」(Ibid.:23=34)のだと述べている。加えて、彼女は、「諸々の生の様式が集まれば、パッチに根差したアセンブリッジが形成される。アセンブリッジは、生の可能性——人間が攪乱した地球での共通の生の可能性——を考える場である」(Ibid.:163=243)と述べる。パッチとは群集生態学における群集の単位の一つであり、その周囲とは異質であるがその内部がほぼ均質な小空間、種の相互作用が可能な範囲のことを指す。攪乱への応答としての「世界制作 (world-making)」(M:21=32)、そこでは多くの種が、＜異律的な主体＞として相互に作用しながら、互いの生を作り合っている。このような相互作用の集まりがアジャンスマンである。

では、ガタリのアジャンスマンはどのようなものなのだろうか。ガタリは、『機械状無意識』において、最も簡潔にアジャンスマンを規定している。彼によると、集団とは領土化されたアジャンスマンである (Guattari 1979:60=62)。領土化とは、自らをあるいは自らの周囲を、自身にとって馴染みのあるものとする運動である。そしてガタリ(とドゥルーズ)において、領土化は脱領土化の運動とセットである。したがって、領土化されたアジャンスマンが集団であるならば、脱領土化されたアジャンスマン、あるいは馴染みのある空間から逸脱する、集団とは異なる何かがあるはずだ。

では、脱領土化した集団とは、どのように表されるのだろうか。ガタリとドゥルーズは、そのような集まりを＜群れ＞と呼んでいる。群れとは、「家族や国家とは異なる内容の形式や表現の形式を動員しつつ、家族や国家にひそかに働きかけ、外からかき乱し続ける」(MP:296=169)ものである。

このようなガタリにおけるアジャンスマンの規定から見て取れることは、二つある。一つは、アジャンスマンにも多様な形態があるということ。もう一つは、その形態が他のアジャンスマンとの関係でしか規定されないということである。前者の規定は、アジャンスマンが領土化の形態を持つ以上、

そこに脱領土化した形態が伴うという点から明らかである。そして後者が意味するのは、ある特定の群れがそれとしてあるのは、それが家族や国家との関係によってであるということだ。領土化した集団があるからこそ、脱領土化した群れは機能する。

以上に見てきたチンとガタリとのアセンブリッジ＝アジャンスマンの規定を見てみると、一つのアジャンスマンが他のアジャンスマンとの関係においてこそ規定されるという共通点を見出すことができる。チンにおいても、あるアセンブリッジは別のアセンブリッジから見ると群れとして現れる。まとめると、アジャンスマンとは、多様な様態が織りなす集まりであると同時に、開かれていると同時に閉じており、相互に規定しあう共存の様態である。

さらに、このような群れの規定を、近藤による相互行為論に差し戻すことができる。なぜなら、このような群れは、近藤においてはアナーキー型の相互行為に相当するからだ（近藤 2023:166）。近藤においては、一度定まったルールをかき乱すものとして群れ（近藤の語彙では戦争機械）が措定されている。そして近藤においては、アナーキー型はカジノ型と相互依存関係にあることから、近藤の議論はガタリとチンのものと並行している。

ここで、カジノ型を過度に重視することが危険であったことを思い起こそう。このとき、問題はもはや人間と＜自然＞等々の間の相互行為ではない。問題は、いかにして期待を成立させつつ、イレギュラーにも対応する柔軟性を担保することができるか、である。さらに言えば、その柔軟性の獲得方法も問題である。なぜなら、異質なものを排除することで成立するアジャンスマンに異質なものを過分にぶつけると、そのアジャンスマンのバランスや受容能力を破壊してしまうだろうからだ。まさに、いかにしてあるアジャンスマンが異質なものに対する＜免疫＞のような機能を獲得するのが問題なのである。

そこで、我々が注視しなければならないのは、ガタリが過激な脱領土化ではなく、「穏やかな脱領土化」が必要だと述べている点である⁽⁷⁾ (TE:37=36)。この言葉をこれまでの議論と照らし合わせると、異質なものを自らが破壊されない程度に取り入れることとして理解することができるだろう。群れ＝異質なものは硬直した組織を脅かす存在として現れる。ただし、それは硬直した組織を破壊するというものでは決してない。ガタリは、穏やかな脱領

土化について、以下のように述べている。

[……] 穏やかな脱領土化は、さまざまなアジャンスマンを建設的でプロセス的な様式で進展させることができる。そこに、すべてのエコロジ的な実践の核心がある。非シニフィアンの諸々の断絶、実存的な触媒は手近にあるが、それらに表現的な支えを与える言表行為のアジャンスマンが不在のとき、それらは受動的に留まり、一貫性＝共立性を失う恐れがある（不安や罪悪感、一般的には、あらゆる精神病理学的な繰り返しの根源を探すべきはこの側面にだろう）。(TE:37-38=36)。

ここで引用された一節では、エコロジ的な実践の二つの対立する方向性を読み取ることができる。一つは、表現的な言表行為のアジャンスマンが不在の場合、もう一つは表現的なアジャンスマンの場合である。ここから、穏やかな脱領土化をなすエコロジ的な実践は、表現的なアジャンスマンをなしうるものであると言えるだろう。このように読むとくいかにして穏やかな脱領土化をなしうるのか>という問いは、くいかにしてアジャンスマンを表現的にすることができるのか>、という問いへと変形される。

<表現的>という語に着目することから始めよう。表現とは、文字通りの意味で表現である。それは、何かを指し示し、表す。そのため、ガタリとドゥルーズの述べる、「リズムやメロディーの<表現への生成変化>」(MP:388=328)は芸術と呼ばれ、芸術はまず「ポスター、あるいは立札」(Ibid.:388=329)（強調は原文）だと言われる。

では、このポスターあるいは立札は、何を指し示しているのだろうか。それは、<領土 (territoire)>である。つまり、表現とは自らの領土の表現である。そして、領土を表現するリズムとメロディーが「リトルネロ」と呼ばれる (Ibid.:389=330)。

リトルネロは領土のポスターである。言い換えると、リトルネロは領土を表現する。ならば、表現的でないアジャンスマンとは、自らの領土を持つことができていない、あるいはそれを示すリトルネロがないアジャンスマンだということになる。そしてすでに引用したガタリの言葉によれば、それゆえに個体は不安に苛まれる。したがって、不安に脅かされているある個体が

すべきことはまず、自らの領土を形成し、それを標示することである。

ではこの文脈をアジャンスマンに移し替えるとどうなるか。これまで特に問題にしてきたのは、カジノ型に傾倒するアジャンスマンである。これはすなわち、領土を形成できていないというよりもむしろ、一つの領土に固執し続けているアジャンスマンであり、自らの創造したルールの範囲内でしか動くことのできない集合である。そしてこれまでの議論に鑑みて、このアジャンスマンは表現的ではないし、そこでは共生の可能性も閉ざされている。ではいかにしてこれを表現的にするのだろうか。ここで考えられうるのはまず、そのアジャンスマンを脅かす異質なものを、そのアジャンスマンを破壊しない程度に注入することだろう。いくら固着したアジャンスマンであっても、元来はイレギュラーなものとのせめぎ合いの中で自らの領土を形成したはずである。であるならば、そのアジャンスマンの安住に緊張を走らせる何かを投入することによって、領土を形成するプロセスを半ば強制的に引き起こすことが一つの方法となりうるのではないか。作用と反作用からなるアフォーダンスの関係、これが共生の条件の一つであると考えられる⁽⁸⁾。

8. 終わりに

本稿では、ガタリにおける〈生き方〉の問題を明らかにすることから始め、共生の条件を示そうと努めてきた。最後に、本稿の流れを整理した上で再度結論を下したい。

本稿での目的は、共生＝生成変化の条件を示すことである。この取り組みにおいて、本稿は大きく三部に分節されるだろう。第一部は第二節と第三節にあたる導入部である。そこではガタリとチンの重合を、〈生き方〉という問題系から描き出すことを試みた。まずはガタリにおける三つのエコロジー、これらの総合によって織りなされるエコゾフィーを明らかにし、それによってガタリにおける〈生き方〉の問題を取り出した。そしてチンの取り組みも、このエコゾフィーという観点からガタリと同様の問題系があることを明らかにした。

第二部に当たるのは、第三節の終わりから第五節までである。ここで問題となったのは、共生＝生成変化を不可能にする機制だった。まず第三節で、チンと共に＜マツタケの不確定性にもかかわらず、なぜ人々は里山に関わるのか＞、という問いを立てた。そしてこの問いにおける重要な語として＜不確定性＞に着目し、第四節でサルトルを補助線としながらガタリにおける不確定性について論じ、それをチンを比較検討することでその語の意味するところを取り出した。その結果、不確定性とは生成変化の可能性であるという定式が見出された。ここで不確定性という語が生成変化と密接な関係をもつことがわかる。しかし同時に、ガタリとチンの間の乖離も明らかとなった。その乖離とは、チンにおいては生成変化しないものはいないにもかかわらず、ガタリにおいては生成変化しないものがあるというものである。そこで我々は、＜生成変化するものもいるが、しないものもいるのはなぜか＞という問いを立て、生成変化を拒む機制に踏み入ることとなった。

そこで論じられるのが＜不安＞の概念である。我々の見たところでは、不安とは行動の未規定性が露わになったときに感じられる負の感情である。そして、これに対して二つの方向が見出された。一つは生成変化を拒むもの。もう一つは生成変化の余地を残すものである。そして前者に共生が不可能であるような条件を見た。しかし二点の不足も明らかとなった。一つは、サルトルの議論が人間にしか向いていないこと、もう一つは共生の条件について語りえないことである。

この議論以降の第六節と第七節が、共生の条件について論じる第三部に当たる。まずは我々は新たに問いを立てることとなった。すなわち、＜生成変化を拒む方向とそうではない方向を分つのはなにか＞、という問いである。この問いに答えるために、我々は第六節で相互行為論についての議論へと進んだ。ここで主に取り上げたのは、近藤による＜カジノ型＞と＜アナーキー型＞というゲームにおける相互行為の類型である。カジノ型とは、人間同士の共通項を見出し、それをルールとして立てるという類型である。一方でアナーキー型とは、その都度の一挙手一投足が新たにルールを作ると同時に、先行するルールを変更するという類型である。そしてこれら二つの類型は相互依存の関係にあり、人間の相互行為はこのグラデーションを彷徨しているということができる。これら二つのグラデーションによって、我々は過度な不安に脅かされることなく、あるいは過度に厳密な体系に圧迫さ

れることもなく、日常生活を営むことができる。しかしここでは、一つの問題が見出された。それは、カジノ型に傾倒しすぎると、イレギュラーなものに対応することができなくなるというものである。そこで本稿は、ガタリ・チン・近藤が共有する概念であるアジャンスマンの議論を通じて、カジノ型とアナキー型との均衡を探る段階に移った。それが第七節である。

第七節では、特にチンとガタリにおけるアジャンスマンの概念を明らかにするところから始めた。まずチンにおけるアジャンスマンとは、多くの種が互いに、そして自らを取り巻く環境に作用することで形成される、一つの生のである。これと比較して、ガタリにおけるアジャンスマンとは、複数のタイプが想定されている、複数の存在者の集まりである。そしてそのタイプは、他のアジャンスマンとの関係によって規定される。それを経て、このようなアジャンスマンを＜存在者の集合であり、開かれていると同時に閉じている、その存在者の共生の様態＞として定義し、それを近藤による議論へと移し替えることが可能であることも示した。それによって、我々にカジノ型一辺倒のアジャンスマンを柔軟にする方法についての一つの手掛かりが与えられた。それは、アジャンスマン同士の相互関係において、過激な仕方ではなく穏やかな仕方で、ある固着したアジャンスマンを柔軟にする、つまりそこに生成変化の可能性を持ち込むという視点である。これについて論じるために、＜表現＞というガタリとドゥルーズの語に着目した。そこで出てくるのが、領土とリトルネロとの関係である。領土はリトルネロによって表現される。アジャンスマンには表現的なものとそうではないものがある。この後者が、我々がこれまでに問題としてきたアジャンスマンである。そして、このアジャンスマンを表現的にするためには、そもそもの領土を標示する段階へとそのアジャンスマンを連れ戻すことという方法が挙げられ、これを共生の条件の一端として提示した。

以上の議論を見るに、本稿が結論を急いでしまったということは否めない。しかし、共生の条件について思考するための道標の一つを提示することはできた。さらなる議論は今後の課題として本稿を終えることとしたい。

注

- (1) 例えば、ラトゥールについては、ガタリおよびドゥルーズとの接点が多く論じられている。カストロについては、カストロ（2023）、Jaques（2021）を参照。チンについては、彼女とガタリとの緩やかな接点を指摘したものとして、Montebello（2019）などがある。また、ガタリも議題に挙げられている、ラトゥールやチンらによる対談も公開されている（Latour, Stanger, Tsing, Bubandt, 2018）。
- (2) 本稿で参照した外国語文献は、基本的にこの論文の著者が訳したものである。改訳の必要があると判断した場合は、既訳を参照しつつ適宜改訳した。
- (3) のちに三つのエコロジーとしてあげられる環境、社会、精神の三つとの対応を考えると、ここで言われている人間的主観性は精神エコロジーと換言されているとみなすのが妥当だろう。
- (4) 確かにまつたけ十字軍のメンバーの共生と過去の里山での共生には大きな違いがある。特筆すべきは過去の里山での共生においては里山から得られる薪などの資材や山菜などの食料は生活において重要なリソースであったのに対し、まつたけ十字軍の人々はボランティアであることからわかるように里山のリソースに依拠した生活をしていない。ここで想起されているのは人と自然が共生しているというその事実である。
- (5) もちろん、不安の概念についてはこれまでに多くの議論の蓄積がある。それはパスカルからキルケゴール、ハイデガーにまで至る議論である。しかし、ここではガタリのテキスト上の制約から、サルトルに議論の範囲を狭めたい。不安の概念の歴史をまとめたものとしては、川神（1989）を参照。また、これから展開する議論は、サルトルが未来を前にした不安と呼んでいるものだが、彼は並べて過去を前にした不安についても書いている。しかし本稿で重要なのは前者のため、後者には触れない。
- (6) しかしながら、ここで考えなければならない問いが出てくる。それは、「不確定性」と「未規定性（indétermination）」とを同列に扱うことは正当かという問いである。この問いは「不確定性」を議論の中心の一つとしている本稿において、重要なものである。では、この二つの語をどのように扱えば良いだろうか。それは、サルトルにおける恐怖と不安との関係に、不確定性と未規定性に対応させることによってである。サルトルにおいて恐怖は、私にコントロールすることのできない蓋然性として現れた。それは先の例において、私がある石ころの上で滑ってしまうかもしれない石ころである。サルトルはあっさり通り過ぎてしまっているが、ここで考えなければならないのは、この私と石ころとの関係である。つまり、私は断崖という場所にいることで、私という様態は石ころという様態に影響を受けているのだ。このとき、私はチンの言うような意味での不確定な存在として立ち現れている。そして、可能性はこのような不確定性を乗り越えるために私に到来する。事実、サルトルが言うように、可能性が到来するのは「状況が許しているもろもろの論理的可能の総体を背景として」（EN:76=135）である。ところが私は、可能性が到来するとともに、私の行動

が可能性でしかないということに不安を感じる。言い換えると、私は可能性によって、私の行動の未規定性に出会うのだ。以上から、不確定性は未規定性の条件であるということが出来るだろう。それは、不安が恐怖から出てくると同様の論理によってである。この意味で、本節の冒頭で述べたように、不安は不確定性から出てくるのだ。

- (7) 脱領土化について論じているものは多くあるが、「穏やかな」という脱領土化につけられる形容詞に注意を払ったものは、Colebrook (2016) や Kleinherenbrink (2015) などの重要な研究においてもほとんど見当たらないように思われる。この語の見落としは、脱領土化をしさえすれば良い、どんな形であれ変化すれば良いという言説を生み出す危険性がある。
- (8) この議論は、人類学の分野では「ケア」という概念で表されるものである。ケアの概念を大々的に取り上げている論者としては、とりわけモルの名前を挙げることができるだろう。例えば Mol (2008) を参照。また、ここで扱ったリトルネロの概念は、ガタリとドゥルーズによってより緻密に論じられているものである。本稿でその全体を扱うことはできなかったが、ガタリのリトルネロを仔細に論じたものとして、山森 (2013) の補論を参照のこと。

【略号一覧】

EN : Sartre, Jean-Paul. 2023. *Être et Néant : Essai d'ontologie phénoménologique*, Lonrai. (=2022『存在と無 I 一現象学的存在論の試み―』松浪 信三郎訳、筑摩書房)。

MP : Deleuze, Gilles, Guattari, Félix. 2021. *Mille Plateaux : Capitalisme et Schizophrénie II*, Paris, Minuit. (=2010『千のプラトー 中―資本主義と分裂症―』宇野 邦一他訳、河出書房新社)。

TE : Guattari, Félix. 1989. *Les Trois Écologies*, Paris, Galilée. (=2008『三つのエコロジー―』杉村 昌昭訳、平凡社)。

M : Tsing, Anna Lowenhaupt. 2015. *The Mushroom at the End of the World : On the Possibility of Life in Capitalist Ruins*, New Jersey, Princeton University Press. (=2023『マツタケ―不確定な世界を生きる術―』赤嶺 淳訳、みすず書房)。

参考文献

カストロ、エドゥアルド、ヴィヴェイロス、デ 2023『食人の形而上学―ポスト構造主義的人類学への道―』檜垣 立哉、山崎 吾郎訳、洛北出版。

稲田 晴年 2003「脱領土化と実存的不安」『国際関係・比較文化研究』1(2):157-175。

https://www.google.com/url?sa=t&source=web&rct=j&opi=89978449&url=https://u-shizuoka-ken.repo.nii.ac.jp/record/975/files/AA11845283200303001010.pdf&ved=2ahUKEwirr_eSX1K6HAXgk1YBHf2bD2YQFnoECBQQAQ&usq=AOvVaw132gF9AC3EV_0KyNkp6S_n (2024/7/24 アクセス)。

- 奥野 克巳 2023「生命の薄膜—ラトゥールとマルチスピーシーズ人類学」『現代思想』51(3):229-241。
- 川神 傳弘 1989「サルトルの実存的 [不安] について」『仏語仏文学』18:77-92。
<https://kansai-u.repo.nii.ac.jp/records/13379> (2024/7/25 アクセス)
- 近藤 和敬 2023『人類史の哲学』月曜社。
- 山森 裕毅 2013『ジル・ドゥルーズの哲学—超越論的経験論の生成と構造—』人文書院。
- Gervais, Charles. 1969. Y a-t-il deuxième Sartre ? À propos de la « Critique de la raison dialectique », *Revue Philosophique de Louvain*, 93 : 74-103.
https://www.persee.fr/doc/phlou_0035-3841_1969_num_67_93_5477 (2024/7/23 アクセス)
- Colebrook, Claire. 2016. 'Grandiose Time of Coexistence': Stratigraphy of the Anthropocene *Deleuze and Guattari Studies* 10(4):440-454.
<https://www.euppublishing.com/doi/abs/10.3366/dls.2016.0238?journalCode=dls> (2024/07/25 アクセス)
- Guattari, Félix. 1979. *L'inconscient Machinique :Essai de schizo-analyse*. Clamecy. (=2004『機械状無意識』高岡 幸一訳、法政大学出版局)。
- Jaques, Vincent. 2021. Deleuze et Guattari opérateurs du dépassement nature/culture en anthropologie ? Anthropologie et philosophie chez Viveiros de Castro. *Rue Descartes* 99 :27-38. <https://www.cairn.info/revue-rue-descartes-2021-1-page-27.htm&wt.src=pdf> (2024/07/25 アクセス)
- Kleinherenbrink, Arjen. 2015. Territory and Ritornello : Deleuze and Guattari on Thinking Living Beings. *Deleuze and Guattari Studies* 9(2):208-230.
<https://www.euppublishing.com/doi/citedby/10.3366/dls.2015.0183?role=tab> (2024/07/25 アクセス)
- Latour, Bruno, Stanger, Isabelle, et al. 2018. Anthropologists Are Talking : About Capitalism. Ecology and Apocalypse, *Ethnos : Journal of Anthropology* 83(3).
<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/00141844.2018.1457703> (2024/7/27/アクセス)
- Malinge, Yoann. 2018. Agir dans l'angoisse ou par habitude ? : La liberté de l'agent dans la philosophie existentialiste de Sartre. *Philonsorbonne* 12 :139-151.
<https://journals.openedition.org/philonsorbonne/1016> (2024/7/17 アクセス)。
- Mol, Annemarie. 2008. *The Logic of Care :Health and the problem of patient choice*. New York:Routledge. (=2022『ケアのロジック—選択は患者のためになるか』、田口陽子・浜田 明範訳、水声社)。
- Montebello, Pierre. 2019. Précarité ontologique et consistance d'être. *Alter* 27 : 189-209.
<https://journals.openedition.org/alter/1918#quotation> (2024/7/24 アクセス)。

Querrien, Anne. 1996. Broderie sur *Les Trois Écologie* de Félix Guattari. *Chimères* 28:49-56.
https://www.persee.fr/doc/chime_0986-6035_1996_num_28_1_2076 (2024/7/25 アクセス)